



本日はよくお参り下さいました

夏空がまぶしく感じられることとなりましたが、いかがお過ごしでしょうか。先月末に祭礼実行委員会が開かれ、来月行われる夏祭りに向けて、動き出しました。その他にも、今月末には長沢の兼務社、天照大神でも夏祭りがあったりと、この二か月間にお祭りが集中しています。どうか皆さまのお力添えをよろしく願います。さて今月はお盆の月、みたままつりの月です。「草葉の陰から見守る」という言葉がありますが、神道では、ご先祖さまの御霊は、常に私たちを見守って下さっていると考えます。この祖霊を慰め、霊威が高まって頂くために行う「まつり」を「先祖まつり」といいます。お盆やお彼岸、法事も先祖まつりの一種です。よくご自分のことを「無宗教だから」という方もいらっしゃいますが、神道には経典がありませんから、無宗教というのはある意味正しいかもしれません。菅公の歌に「心だに 誠の道にかなひなば 祈らずとて 神や守らむ」とありますが、大切なのは、神さまやご先祖さま、他人や物にも、誠の心で接することだと、この歌は教えてくれています。心豊かな暮らしを送るためにも、良いことはどんどん実践していきたいですね。今月も皆様のご無事をお祈り致します。権禰宜道子



7月

1日・15日 月次祭(つきなみさい) 皇室の弥栄と国家の発展、氏子・崇敬者並びに社会の幸福と平和を祈ります。

1日 半夏生 梅雨の終期にあたり、農家の人たちは、この日までに田植えを済ませる習慣がありました。

7日 七夕・小暑 この日から暑気に入り、小暑の前後に梅雨が明け夏の太陽が照り付けたり、梅雨明け前の集中豪雨に見舞われることも多いので注意が必要です。

18日 海の日 この日の由来は明治九年明治天皇が東北地方御巡幸の帰途、灯台視察船「明治丸」をご利用になり、無事横浜に帰還されたのが7月20日であったことから、その後昭和16年に国民の海への関心を深めるため定められました。



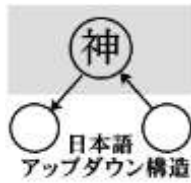
22日 大暑 梅雨明けの頃で、一年中で最も気温の高い酷暑の季節となります。夏の土用はこの季節に入ります。

30日 土用の丑の日 土用は四季の終わりに各18日配当されています。これは、五行説によって春は、木、夏は火、秋は金、冬は水にあてられ、土に配当する季節がないため、四季の終わりにわけたためです。夏の土用は一年で一番暑い時期、丑(うし)の日に「う」の付く物(うどん・うり・梅干など)食べると体に良いとの言い伝えがあったと言われています。「うなぎ」もこれにあてはまるわけですね。

天神さまの豆知識

ー日本語は神であるー

最近読んだ本の内容を簡単に紹介しましょう。ー日本語を使う人は無意識のうちには神様とつながっています。つまり日本語は「無自覚」の宗教のようなはたらきをするのです。例えば「ありがたう」の言葉には、誰に対して感謝するのか明示されていない上に、感謝の心も直接的には表現されていません。日本人の意識は、いつも目に見えない世界、深層の世界に向けられています。しかも日本人は、そのことを自覚せずに使っています。目に見えない世界に『私』がいて『あなた』がいる。両者を共に支えて生かして下さる存在がある。日本語を話す日本人の深層意識は、その存在を知っていて、見える世界「あなた」の好意に対しても、表面的に「あなた」に御礼をいうだけでなく、そもそも「あなた」を根本から生かし、「私」を根本から生かして下さる目に見えない存在に対する無意識の感謝が言葉となつています。「ありがたう」の根底には大宇宙の不思議に対する驚きがあり、人智を超えた仕組みに対する畏敬の念があるのです。ー言葉には言葉が宿るといいますが、皆さんはどう思いますか。参考『日本語は神である』原容成著トランススヘーヌ研究所



お祭り歳時記

那智の火祭り 七月十四日

和歌山県東牟婁郡那智勝浦町熊野那智大社、那智山の信仰は、神武天皇東征の折に、那智の滝を大己貴命(大國主命)の御霊代として祀ったことに始まります。全国三千有余社の熊野神社の御本社でもある熊野那智大社から御滝前の飛滝神社へ年に一度の里帰りの様子を表しています。十二体の熊野の神々を、御滝の姿を表した高さ6mの十二体の扇神輿にうつし、御本社より御滝へ渡御し、御滝の参道で重さ五〇kgの十二本の大松明をお迎えし、その炎で清める神事です。

今月の言葉

『善く行く者は轍迹なし』

てっせき

老子

上手に歩く人は足跡を残さない。立派な仕事を成し遂げた人ほど、これは自分がやった仕事だ、という記録を残さない。社会に貢献するにしても目立たぬ貢献をしている。価値ある功績とはそういうものだ、と『老子』は説く。『老子』が、つねに弱者の立場に立っていることを考えれば、この言葉の解釈はさらに広がりをもってくる。世の中には、縁の下の力持ちのような地味な仕事がたくさんある。『老子』はそういう仕事こそ価値がある、といったのであろう。参考文献『中国古典一日一語』守屋 洋著 三笠書房発行